

火浣布をめぐる言説

——魏晋における「異物」の記録と語りの世界——

大平 幸代

はじめに

火浣布——火もて浣う布——とは、石綿（アスベスト）のこと。現代においては、不思議でもなんでもない物質だが、曹魏の頃には、その存在すら疑われる「異物」、すなわち世にも稀なる物であった。東晋の干宝（?—三三六）『搜神記』巻十三に、こんな話がある。

漢世、西域舊獻此布、中間久絶。至魏初時、人疑其無有。文帝以爲火性酷裂、無含生之氣、著之典論、明其不然之事、絶智者之聽。及明帝立、詔三公曰、「先帝昔著典論、不朽之格言、其刊石于廟門之外及太學、與石經並、以永示來世」。至是、西域使人獻火浣布袈裟、於是刊滅此論、而天下笑之。

漢の時代、西域からはもともこの布が献上されていたが、途中久しく途絶えており、魏の初めには、人々はその存在を疑っていた。文帝（曹丕）は、火の性質は酷烈であり、生の気を含まないと考えていたので、このことを『典論』に述べ、そんなものはないと明言し、智者が聴き知ることのないようにした。明帝が即位すると、三公に詔し、「先帝は昔『典論』を著された。これは不朽の格言であるゆえ、石に刻して廟門の外と太学に置き、『石經』と並べて次の世にまで永く伝えるように」と述べた。ここにいたって、西域からの使者が火浣布の袈裟を献上してきた。そこで、この論を削りつつたが、天下の笑い者になった。

ここに西域からの貢献の品といっているように、火浣布は、中原の人の目には奇異に映る遠国の物であった。後に述べるように、後漢から南北朝にかけての時期には、遠方から多くの品がもたらされるとともに、数種の「異物志」が編まれ、珍し

い動植物や風俗が記録されるようになったが、火浣布ほどその真偽が劇的に語られているものはないようだ。

人々の常識の外にある物の存在が認められるには、何らかのきっかけが必要になる。例えば、奇怪な人や物だらけの『山海経』の記述が真実味を帯び始めたのは、書中の「式負の臣」らしきものが実際に発見されたからであった。その発見、いや再認識の衝撃が大きければ大きいほど、その物の存在感が強く印象づけられるようになる。その点、火浣布の貢献とそれに伴って明らかにされた魏の文帝（曹丕、一八七—二二六）・明帝（曹叡、二〇五—二三九）の失態は、中原の常識では推し量れない、異域の「異物」の存在を確信させるに足る、象徴的な出来事であった。本稿は、この火浣布をめぐる出来事の再検討を通して、魏晋期において「異物」に対する認識がどのように変容し、「異物」をめぐる話がどのように語られていったのか、その一端を明らかにすることを目指したものである。

一、「典論」と火浣布

先に、魏の文帝の火浣布／石刻典論事件（以下、「石刻事件」という）は、「異物の存在を確信させる……出来事であった」と述べたが、より正確には「出来事として語られてきた」と言うべきであろう。『搜神記』の記事はあくまで『搜神記』編纂時に伝わっていた話にすぎないのであるから。だが、そもそも、この逸話は、どこまで事実を伝えているのだろうか。虚構が混じっているとすれば、何を言わんとし、どこに重点を置いて語られているのだろうか。その答えを導くために、まずは、他書の類話や史書と比較しながら『搜神記』の記事の内容を検討してみよう。

『三国志』魏書・三少帝紀によれば、火浣布が献上されたのは、斉王芳の景初三（二三九）年二月のこと。明帝はすでにこの年の一月に亡くなっている。この時、斉王芳が、大將軍や太尉に検分を命じ、百寮に披露していることからみて、火浣布は人々が目にしたことのない非常に珍しいものだったに違いない。よって、明帝が火浣布を見て石碑を削ったとは考えにくい。

また、魏の王肅（一九五—二五六）の「聖証論」（『太平御覧』卷三四六引）にも「昔國家有優、曰史利、漢氏舊優也、云梁冀有火浣布、切玉刀、一朝以爲誕而不信

也、正始初得火浣布、乃信（昔、国家に優⁷がいて、史利といった。漢の時の優である。優は、梁冀が火浣布や切玉刀（堅い玉でも泥のように切れる刀）を持っていたと言ったが、宮廷中の誰もがでたらめだと思ひ信じなかった。正始年間（二四〇—二四九）の初めに火浣布を得て、やっと信じた」という。火浣布到来の年に僅かな違いがあるが、やはり齊王芳の時代の出来事である。

一方、『典論』を石に刻したのは、明帝に違いないようだ。明帝紀によれば、太和四（二三〇）年、『廟門の外』に石碑を立てている。ただ『搜神記』に「廟門の外及び太学」というのは異なる。この相違については、裴松之が宋の高祖の北伐に随って洛陽に行った際、土地の長老から聞いた「晋の初めに刻石を（廟門の外から）太学に移した」という話が参考になる。魏と晋では碑の場所が違っていたのである。

実のところ、碑文を削り取ったという記録は、『搜神記』をはじめとする東晋以降の文献にしか見えない。それ以前に火浣布に言及したものとしては、西晋の傅玄の『傅子』、張華の『博物志』等があるが、いずれも魏文帝のことにも『典論』のことにも触れない。まず、『博物志』（『太平御覽』卷三四五引）には、

周書云、西域獻火浣布、昆吾氏獻切玉刀。浣布汙燒之則潔、切玉刀切玉如泥（一云切玉如蠟蜜）。布漢魏世有獻者、刀則未聞。

『周書』にこういう。「西域は火浣布を献上し、昆吾氏は切玉刀を献上してきた。火浣布は汚れたときに焼けばきれいになり、切玉刀は泥を切るように玉が切れた（一説に、蠟蜜のように玉が切れたという）。布は漢魏の時に献上するものがいたというが、刀については聞いたことがない。

このように、魏の時の火浣布に言及しておきながら、『典論』の話は出てこない。

『傅子』（『太平御覽』卷八二〇引）の方も、

長老説、漢桓帝時、大將軍梁冀作火浣布單衣、會賓客、行酒公卿朝臣前、佯爭酒失杯而汙之、僞怒、解衣而燒之、布得火煒燁、赫然而熾、如燒凡布、垢盡火滅、粲然潔白、如水澣之。

長老のいうことには、漢の桓帝の時、大將軍の梁冀が火浣布の単衣を作った。賓客をあつめ、酒杯を公卿朝臣の前にまわし、酒を争い杯をこぼしたふりをし

て単衣を汚した。そして怒ったふりをして、服を脱いで焼いた。布には火がついて輝き、赤々と燃えて、普通の布が焼けているようだった。汚れが尽きると火が消え、輝くばかりに真っ白になって、水で洗ったようだった。

ここにいう梁冀の逸話は、先の王肅『聖証論』に出てきた優⁷の話に重なるだろう。どうやら、火浣布と聞いて魏文帝が連想されるようになる前は、梁冀の話の方が有名だったようだ。

以上の状況から考えて、石刻事件が事実であつたかどうかは極めて疑わしい。可能性の一つとしては、「石碑の移動を知らなかった人たちが、廟門の外の碑が毀れたと誤解した」ところから生じた話である、という推測も成り立つ。石刻事件の疑わしさは、次にとりあげる葛洪（二八三—三六三）『抱朴子』論仙の話を見れば一層深まる。

魏文帝窮覽洽聞、自呼於物無所不經、謂天下無切玉之刀、火浣之布、及著典論、嘗據言此事。其間未期、二物畢至。帝乃歎息、遽毀斯論。事無固必、殆爲此也。

魏の文帝は世のあらゆる物を見聞きした物知りで、この世で知らない物は無いと言ひ、天下に切玉の刀や火浣の布などないと思っていた。『典論』を著したときにも、この事に言及した。それから一年もたたないうちに、二つとも届けられた。帝はため息をついて、この論を破棄してしまった。「物事には必ずそうである」ということではない」とは、おそらくこのことを言うのだろう。

ここでは、文帝自身が『典論』を毀つたことになっているが、文帝の時に火浣布や切玉刀がもたらされたという話は他書には見えない。結局、確実にいえるのは、『典論』を破棄する話が東晋の初めに数種のバリエーションをともなう語られていたことのみで、石刻事件どころか、そもそも『典論』に火浣布のことが論じられていたかどうかさえ確かでないのだ。

では、仮に『典論』に火浣布のことが述べられていなかったとしたら、どうだろう。わざわざ『典論』を持ち出す意味があるだろうか。次章でみていこう。

二、『抱朴子』と『搜神記』のねらい

(1) 曹丕の博学と『典論』

『典論』は現在、一部分しか伝わらないが、「自叙」(『三国志』魏書・文帝紀裴注引)の中にその博識ぶりを伝える記事がある。

及長而備歷五經四部、史漢諸子百家之言、靡不畢覽。

成長すると五経や四部の書、史記・漢書・諸子百家の言をすべて読み、見ない物がなかった。

また文帝は『皇覽』を編纂させてもおり、天下の書物を博搜した人物だと自他ともに認める存在である。では、火浣布のような「物の知識」についてはどうだろうか。

『博物志』には「魏文帝所記諸物相似亂者(魏の文帝が記した、似ていて紛らわしい物)」という一条があり、嚴可均はこれも『典論』の文だと見なしている。^⑩現存する文を見る限り、この条は、「武夫怪石」と「美玉」、「蛇牀」と「靡無」などよく似た物の区別を述べたものらしい。曹丕がこのような細かな玉石や草木の区別を述べるのはなぜだろう。

一般的に、文人にとって、物の弁別は、詩賦などの読解・創作に必要な知識である。例えば、「武夫石」は、司馬相如「子虚賦」(『文選』巻七)に「礪石礪砮」と見え、魏の張揖がそれに注して、模様の入った、玉に次ぐ石だとしている。^⑪「靡無」も同じく「子虚賦」に「苙薶薶燕」と見え、張揖の注に「蛇牀に似ているが香りがある」という。^⑫このような知識を披露することは、詩賦を得意とした曹丕の面目躍如といったところだろう。ただ、曹丕が単なる詩人でも訓詁学者でもなく、帝位に近い位置にいたことを考えれば、さらに別の含みも見えてきそうである。

曹丕は帝位についてから、しばしば各地の貢物に言及し品評している。一例として、布について述べているものを挙げておこう。^⑬

魏文帝詔曰、夫珍翫所生、皆中國及西域、他方物比不如也、代郡黃布爲細、樂浪練爲精、江東太末布爲白、故不如白疊布鮮潔也(『太平御覽』卷八二〇)

魏の文帝は詔してこう述べた「珍しい物を生み出すのは、みな中国と西域であって、他の土地の物はどれも及ばない。代郡の黃布は細かく、樂浪の練は精

密で、江東の太末布は白いけれども、もとより白疊布の鮮やかで潔いのは及ばない」

古来、『尚書』禹貢に「任土作貢(その土地の産物により貢ぎ物の等級を定めた)」というように、各地の貢物を定め、それが規定通りに納められることが、国家の安定を示した。漢から禅譲をうけた際に「舜禹の事、吾之を知れり」(『三国志』文帝紀裴注引『魏氏春秋』)と述べた曹丕は、太子時代から、文徳による教化を標榜しており、儒教的な帝王学を強く意識していたはずである。実は、『典論』自体もその文徳の一端だと見なされている。魏の卞蘭は「賛述太子表」(『藝文類聚』卷十六引)にこういう。

竊見所作典論及諸賦頌、逸句爛然、沈思泉涌、華藻雲浮、聽之忘味、正使聖人復存、猶稱善不暇、所不能間也。

(太子の)手になる『典論』および賦頌の数々を見るに、すばらしい句が燦然とかがやき、深い思索が泉のように湧きいで、華やかなことばが雲のように浮かび、これを聴くと肉の味も忘れるほどすばらしい。まさに聖人が復活しても賞賛してやまないほどのできばえで、文句のつけようがない。

また、『典論』を石に刻すよう命じた明帝は、その六日前の詔勅に経学的重要性を述べている(『三国志』明帝紀)から、おそらく『典論』石刻もその文教政策の一環だったのだろう。そもそも石に刻すとは、一字の増減もできないほどの権威性を持たせることにはかならない。それを石経と並べるといふのだからなおさらである。文帝自身にもその自負はあつたらしく、『典論』や詩賦を孫権と張昭にも贈っている。^⑭「文章は経国の大業」(『典論』論文)だとする文帝にとって、『典論』は自身の徳化を広める象徴的な意味を担っていたのである。

では、これほどの権威をもつ『典論』が、東晋の説話において嘲笑的にされるのはなぜだろう。次に『典論』の「火浣布否定説」を批判する側の論理を見てみよう。

(2) 『典論』の常理を超えた世界

先に引いたように、『抱朴子』には、曹丕が火浣布の存在を否定した理由として、「自呼於物無所不經、謂天下無切玉之刀」と記されている。曹丕は、あらゆる

物を見つづけた自分が知らないものはこの世に存在しない、と豪語しているのだ。

『抱朴子』を編んだ葛洪は「仙人学んで至るべし」と主張したいのだから、曹丕にこう言わせるねらいは、曹丕の主張のまさに逆、「かつて見た事もないものがこの世に存在する可能性」を示すことにある。博覧強記の魏文帝というイメージを逆手に利用した持論の展開であることは明白である。だが、それだけでもない。

そもそも曹丕は神仙の存在を強く否定している。例えば、『典論』には、曹丕が卻儉ら方士に惑わされることの愚かさを述べた部分がある。また、曹植の「弁道論」にも、曹操が方士を集めた時、曹操をはじめ太子（曹丕）や兄弟たちはみんなあざ笑って信じなかった、という^①。ちなみに、曹植の方は「弁道論」において、方士の言うことが本当かどうか試したと述べ、その実験によってある程度は不思議な力を認めているから、明らかに曹丕のほうが強硬な否定論者である。つまりところ、常理で測れる世界の知識は網羅しているが、それ以外のものを頑なに認めようとしないう存在の最たるものが「曹丕」なのである。その「曹丕」に自身の誤りを認めさせるところが石刻事件のミソなのだ。

『抱朴子』論仙には、こうも言う。「彼二曹學則無書不覽、才則一代之英、然初皆謂無、而晚年乃有窮理盡性、其歎息如此。不逮若人者、不信神仙、不足怪也（かの曹操や曹丕は、学問といえは読んだことのない書物はないほどで、才能といえは一代の英傑であるのに、それでも初めはそんなこと（左慈や甘始の方術のようなもの）は無いと言っており、晩年になってやっと道理を窮め尽くして、溜息をつくようなことになったのだ。彼らにも及ばない者が、神仙を信じないのも、怪しむに足らない）。改心し神仙の術を認めるようになった博學英才の徒「曹丕」——神仙家にとってこれほど便利な存在はないだろう。

なお、不可思議な人物や出来事を記した『列異伝』は、曹丕の編であるとされる一方、懐疑的な見方も少なくない^②。だが、以上のように考えれば、少なくとも、曹丕が『列異伝』の編者とされることには納得がいく。博識と権威の象徴たる人物が、その存在を否定しようとして真偽を窮めつくした末、結局存在を認めた、というのだから、これ以上適切な人選はない。

さて、一方、『搜神記』では、曹丕の主張を「火性酷裂、無含生之氣（火の性質

は酷烈であるので、生の気を含むことはない）」と記している。これに対し、『搜神記』巻十二にみえる干宝の考えはこうである。

中土多聖人、和氣所交也。絶域多怪物、異氣所産也。苟稟此氣、必有此形、苟有此形、必生此性。

中原の地に聖人が多いのは、和氣が交わっているからである。遠方の辺境地域に怪物が多いのは、異氣が生み出すのである。ある種の気をうければ、必ずその種の形を有する。ある種の形をもっているものには、必ずその種の性質が生じる。

干宝は、「氣」によって変化や怪異を論じようとする。異常な気をおびた物は、通常の物とは異なる形状および性質をもっているのが当然なのであって、曹丕のように中原の気や物の理だけで論じるのは武断でしかない。やはり、ここでも、自己の主張に対置させる形で曹丕の発言が用意されていることが見てとれよう。

以上、簡略にはあるが、曹丕の話が東晋初めの常理を超える世界の存在を主張する人々の間で、反証として都合よく語られていたことを確認してきた。曹丕と干宝・葛洪との違いは、あり得ることと認める範囲の広さである。では、この頃、干宝や葛洪のように常理を超えた世界を信じ、それを書物に書き記そうとする人々があらわれてきたのは何故だろうか。次章では、その要因の一つとして、孫呉以来の異物の学に注目してみたい。

三、孫呉の「異物」

魏初に西域からの貢献が途絶えていたのは、事実らしい。『三国志』魏書・文帝紀には、黄初三（二二二）年二月、鄯善・龜茲・于闐の使者が至ったというが、その後も安定しておらず、『三国志』魏書・徐邈伝によれば、明帝の時、徐邈を涼州刺史としたことにより、ようやく「西域 流通し、荒戎 貢を入る」状態になったという。そもそも『三国志』魏書に西域伝のないことが目立った往来のなかった証であろう。

一方、呉には、珍奇な品が続々と献上されていた。左思「呉都賦」（『文選』巻五）は呉の繁栄を描いた作品だが、そこにみえる海産物や動植物・宝玉の多くは、

南方の「異物志」に記されている南海、交趾、合浦などの特産品である。一例として、鳥嶼部の珍品奇物をあげれば、「洪桃屈盤、丹桂灌叢。瓊枝抗莖而敷葉、珊瑚幽茂而玲瓏（洪きな桃の枝は屈曲し、丹桂は生い茂り、瓊枝は真つ直ぐ幹を伸ばして花を連ね、珊瑚は幽美に茂り鮮やかに透きとおる）」とあり、劉達（左思とほぼ同時期の西晋の人）の注によれば、桃は東海の度索山、桂は蒼梧・交趾・合浦以南の山中、珊瑚は扶南の漲海中の産物だとい¹⁹う。

呉の豊かな珍品奇宝、その供給源となった交趾など南方の地は、呉が新たに従属させた地域であった。『三國志』呉書・士燮伝によれば、漢の朝廷へ貢獻していた士燮は、建安末年以降、孫権に「雜香・細葛……明珠・大貝・流離（瑠璃）・翡翠・瑤瑁・犀・象之珍、奇物異果・蕉（芭蕉）・邪（椰子）・龍眼之屬」を毎年献上するようになったとい²⁰う。

さらに、呉は呂岱を広州刺史とし、士燮の死後、広州（南海・蒼梧・鬱林・合浦）と交州（交趾・九真・日南）を置いて直轄地とした。したがって、魏が珍宝を入手するにも、呉を経由するしかないことになる。呉にとつて珍宝は豊かさを示すのみならず、南方支配の象徴でもあったのである。

なお、『江表伝』（『三國志』呉主伝裴注引）によれば、魏の方から呉に南方産の珍宝を要求することもあったとい²¹う。

是歲魏文帝遣使求雀頭香、大貝、明珠、象牙、犀角、瑤瑁、孔雀、翡翠、闐鴨、長鳴雞。羣臣奏曰、「荆、揚二州、貢有常典、魏所求珍玩之物非禮也、宜勿與」。

この年、魏の文帝は使者を遣わして、雀頭香、大貝、明珠、象牙、犀角、瑤瑁、孔雀、翡翠、闐鴨、長鳴雞を求めた。群臣は奏上し「荊州、揚州から、規定通りの貢物を納めており、魏が要求してくる珍奇な品は礼にかなうものではありません。与えないのがよろしいでしょう」といった。

ここでは、礼にはずれた要求をしてくる魏文帝に対し、度量大きく礼節もわきまえた孫権の姿を示す出来事として記録されているのだが、そもそも呉にこのような貴重な品々が集まっていること自体、孫権の徳を示すものでもあった。周知のとおり、古来、通訳を重ねてもたらされる遠方からの貢獻は為政者の徳を表すものとさ

れるが、もちろん呉においてもその状況に変わりはない。陸機の「弁亡論」（『文選』卷五三）には、孫権の世を称えてこう言²²う。

化協殊裔、風衍遐圻。乃俾一介行人、撫巡外域。巨象逸駿、擾於外閑。明珠瑋寶、耀於内府。玫瑰重迹而至、奇玩應響而赴。

教化は遠くの異民族にもいたり、風教は千里四方に及んだので、一人の使者が、遠方を巡回するだけでよかった。巨象や駿馬が、外の馬場に遊び、明珠や美玉が、宮中の蔵で輝いている。珍宝が次々に至り、奇品が求めにに応じてやってくる。

呉の対南政策は、軍事上、経済上の意味をもったと言われるが、副次的にはあれ、帝王らしさの演出という点でも、魏よりはるかに勝る効果をもたらすことができたのである²³。

さて、ここで、話を火浣布にもどそう。『吳時外国伝』²⁴に、火浣布らしきものが登場する。

扶南之東漲海中有大火洲、洲上有樹、得春雨時、皮正黑、得火燃、樹皮正白、紡績以作手巾、或作燈（²⁵炷）、用不知盡。

扶南（今のベトナム・カンボジアの南部）の東、漲海（南シナ海の南半分）の中に大火洲がある。洲の上には樹が生えていて、春の雨の時には、皮が真つ黒だが、（雨がやんで）火が燃えると、樹皮が真つ白になる、紡いで手巾（ハンカチ）を作ったり、灯心を作ったりする。灯心はいくら使っても尽きることがない。

これを書いたのは、呉から扶南への使者として派遣された康泰である。この派遣について、『梁書』諸夷伝にはこうい²⁶う。

海南諸國、大抵在交州南及西南大海洲上、相去近者三千里、遠者二二万里、其西與西域諸國接。……後漢桓帝世、大秦、天竺皆由此道遣使貢獻。及吳孫権時、遣宣化從事朱應、中郎康泰通焉。其所經及傳聞、則有百數十國、因立記傳。

海南諸國は、たいてい交州（今のベトナム北部）の南および西南の大海の洲にあり、近いところ三千から五千里、遠いところは二、三万里離れていて、そ

の西方は西域諸国と接している。……後漢の桓帝の時代、大秦（ローマ）や天竺（インド）はみなこの道を通って使いをおくり貢献した。呉の孫権の時にあって、宣化従事の朱応、中郎の康泰を派遣してこれらの国と通交を開いた。その經由したところや伝聞したところは、百数十国にのぼり、記伝を著した。

ここに言う朱応や康泰の記伝は、すでに散佚しており、諸書に引用されて一部が残るだけだが、注目すべきは、南海や東海の産物だけでなく、西域の物や情報までが、南から入ってきていることである。朱応と康泰は扶南までしか行っていないのだが、折しも天竺にいった扶南の使者が帰ってきたところであり、天竺やさらに大秦のことまで伝え聞くことができたのである。

このように、呉は、実地検分あるいは聞き取りによって、未知の領域を知識として確かなものにした時代であった。空白の地帯が手ごたえのある知識——地名や物の名によって埋まっていたのである。ただし、朱応、康泰の記録自体、伝聞が多い上、それに基づいて編まれた書物となると、実際には、さほど正確とも思われない。

次に引くのは、呉の丹陽太守であった万震の『南州異物志』である。万震自身が南海に行ったという記録はない。

斯調國有火州、在南海中。其上有野火、春夏自生、秋冬自死。有木生于其中而不消也、枝皮更活、秋冬火死則皆枯瘁。其俗常冬采其皮以爲布、色小青黑。若塵垢汙之、便投火中、則更鮮明也。

斯調國（今のスリランカか）には火州があつて、南海の中に位置している。その地には野火があり、春夏には自然に火が起り、秋冬には自然に消える。木がその中に生えているが、焼け崩れない。枝や皮はますます活き活きとし、秋冬になって火が消えると、すべて枯れてしまう。その土地の風俗では、いつも冬にその木の皮を採取して布とする。色は少し青黒い。塵や垢で汚れたら、火の中に投じれば、ふたたび鮮やかになる。

この記事を、先の康泰『呉時外国伝』と比べてみよう。なお、康泰には『扶南土俗伝』（『通典』卷一八八引）という名で伝わる書もあり、『呉時外国伝』と重ならない部分もあるので、原文のみ挙げておく。

火洲在馬五洲之東可千餘里。春月霖雨、雨止則火燃、洲上林木得雨則皮黑、得火則皮白。諸左右洲人、以春月取其木皮、績以爲布、或作燈炷。布若小穢、投之火中便潔。

さて、万震の記述は、「火洲の木皮で布を作る」「汚れたら火に投じればきれいになる」といった点では、康泰の説にはほぼ等しい。だが、両者には、二つ大きな違いがある。一つには、季節。康泰は、雨か否か、すなわち雨期と乾期を対比させているのに対し、万震の方は、春夏秋冬という中国の季節感そのままを火洲に適用しているのである。もう一つの違いは、地理認識。康泰が火洲を扶南（ベトナム・カンボジアの南部）の東にあるとするのに対し、万震は斯調に属するのだが、『万震南州志』（『史記』大宛伝「正義」引）によれば、万震はその斯調を大秦（ローマ）の海中にあるとしている。なお、ここには「火浣布」という言葉もでてくる。

（大秦）大家屋舍、以珊瑚爲柱、琉璃爲牆壁、水精爲礎。海中斯調州上有木、冬月往剝取其皮、績以爲布……世謂之火浣布。

（大秦の）大きな屋敷は、珊瑚を柱とし、瑠璃を障壁とし、水晶を土台石とする。海中の斯調洲には木があつて、冬に行つてその皮を剥ぎ、紡いで布にする。……世の人はこれを火浣布という。

ここだけ見れば、節録による混同の可能性も考えられるが、珊瑚に関しても、次のような記述が残っている。「珊瑚生大秦國、有洲在漲海中、距其國七八百里、名珊瑚樹洲（珊瑚は大秦國に生える。洲が漲海中にあり、その国から七、八百里離れていて、珊瑚樹洲という）」（『世説新語』汰侈篇引『南州異物志』）。万震の認識では、漲海も大秦の一部なのだ。ちなみに、康泰が「漲海」について述べる際には、「扶南の東」と説明する。このように並べると、万震にとっては、実際の場所の正確さよりも、珊瑚や火浣布のような貴重な品は大秦（西域）に属するものという觀念の方が勝っているようにも感じられる。宝の国のイメージをもたらししたのは、もちろん康泰らであろう。

外國稱天下有三衆、中国人衆、大秦宝衆、月氏馬衆。（『外国伝』）

外国では天下に三衆有りという。中国は人が衆く、大秦は宝が衆く、月氏は馬

が衆い。

では、実際に、大秦との往来はあったのだろうか。晋の武帝の太康五（二八五）年、大秦の火浣布が広州經由でもたらされているが、これ以降、東南アジア諸国とすら「晋代通中國者蓋渺、故不載史官（晋代には中国に至った者はおそらく少なかったであろう。ゆえに史官の記録に残っていない）」（『梁書』諸夷伝）という状態になっている。公式ルートでの「異物」の流入や異域との交流が減り、入ってくるのは、商人や仏教僧などによる断片的な情報のみになるのである。だが、そのような状況下にあつて、西域、とりわけ大秦国は、ますます珍品異物の産地としてのイメージを強くしているようである。⁽²⁰⁾

范曄『後漢書』西域伝の大秦国には、「凡そ外国の諸もの珍異、皆な焉に出づ」という。⁽²¹⁾ 西晋の太康五年以来、『後漢書』が成る南朝の宋までに、大秦からの使者の派遣は記録にない。『後漢書』は、それまでの記録や、他の外国人等から間接的に得た情報に基づいたのだろう。実態が分からないまま「大秦の邸宅は、珊瑚の柱に、瑠璃の壁」というイメージが増幅した結果だろうか、范曄は過去の記録まで疑い始める。

至桓帝延熹九年、大秦王安敦遣使自日南徼外獻象牙、犀角、瑠璃、始乃一通焉。其所表貢、並無珍異、疑傳者過焉。

（後漢の）桓帝の延熹九（一六六）年、大秦王の安敦（アントニウス）が使者を遣わし、日南の辺外から象牙、犀角、瑠璃を献じてきた。ここで始めて中国と通じたのである。その貢献の表によれば、珍しい物は何もない。伝える者が誤ったのではないか。

晋代に少なくなった東南アジアとの往来は、宋以降、ふたたび活発になっているから、「象牙、犀角、瑠璃」など、驚くほど珍しくはなかっただろう。呉の康泰らが伝えた南方の情報は、異物を産する南海を強く印象づけるとともに、さらにその先にある、大秦への妄想をかき立てる役割をも果たしているのである。

さて、このような地理認識は、他の学問分野にも影響を及ぼさざるをえないだろう。呉において、検証による地名や事物の具体化に傾いていた学問は、あらたな地理（異域および異物）認識を獲得した後、さらなる新資料を得るすべを失って、観

念化あるいは理論化の方向へと転換しているようだ。そこには、これまで見てきたように、新たな空想の入り込む余地があった。では、ふたたび、火浣布論が活発になった東晋の状況をみてみよう。

四、東晋の火浣布論

火浣布といっても、実のところ、一様ではない。火浣布の素材に言及したもっとも古いものは、「異物志」をのぞけば、西晋の束皙の『発蒙記』（『初学記』巻二九引）にみえる「西域有火鼠之布、東海有不灰之木」である。実体は不明だが、「火鼠の布」「不灰の木」とともに火浣布の一種だろう。これ以降、草木系と鳥獸系（多くは鼠）の火浣布が各書に登場することになるのだが、肝心なのは、素材よりも場所である。

まず、『抱朴子』（佚文、『藝文類聚』巻八〇引）の説をあげれば、

南海之中、蕭丘之中、有自生之火、常以春起而秋滅。丘方千里、當火起時、此丘上純生一種木、火起正着此木、木雖爲火所着、但小焦黑。人或以爲薪者、如常薪、但不成炭。炊熟則灌滅之、後復更用、如此無窮。又夷人取木華、績以爲火浣布。木皮亦剝、以灰煮爲布、但不及華細好耳。又曰、有白鼠、大者重數斤、毛長三寸、居空木中、其毛亦可績爲布。故火浣布有三種焉。

南海の中の蕭丘の中には、自然に生じる火がある。いつも春に火が起り秋に消える。丘は千里四方。火が起る時には、この丘の上には一種類の木だけが生える。火が起るとちようどの木に着く。木は火が着いても、少し焦げて黒くなるだけである。薪にする人もいる。普通の薪のようだが、炭にならない。煮炊きができると水をかけて消す。後でまた使うことができ、尽きることがない。また、夷人は木の華をとって、紡いで火浣布を作る。木の皮も剥いで、灰で煮て布にするが、華の方がずっと繊細で好い。また、白鼠がおり、大きいものは数斤になる。毛の長さは三寸。木のうろに住んでいる。その毛も紡いで布にすることができる。よって火浣布には三種類あるのである。

蕭丘の具体的な位置は不明。『抱朴子』には蕭丘について、次のように述べる。⁽²²⁾
水性純冷而有溫谷之湯泉、火體宜熾而有蕭丘之寒焰。（内篇・論仙）

水の性はもっぱら冷たいものであるのに、温谷の温泉のように温かいものがある。火の体は熱いものであるはずなのに、蕭丘の寒焰のように冷たいものがある。

「温谷」は『山海経』大荒東経や『穆天子伝』に見える地名であるから、蕭丘もおそらく神話的ないわれをもった場所なのであろう。³⁴ただし、葛洪は神話として語っているのではない。実在する火浣布が、場所の存在を保証しているのであるから。葛洪とほぼ同時期の郭璞（二七六—三三四）が、『山海経』大荒西経の「炎火の山」につけた注にも、火浣布が登場する。この火浣布も南海のものであるが、こちらにより具体的な地名をとまなっている。

今去扶南東萬里、有耆薄國。東復五千里許、有火山國。其山雖霖雨、火常然。山中有白鼠、時出山邊求食、人捕得之、以毛作布。今之火浣布是也。即此山之類。

今、扶南から東に一万里行ったところに、耆薄国がある。さらに東に五千里ほど行くと、火山国があり、その山は長雨が降っても、火が常に燃えている。火の中に白鼠がいて、時に山のふもとに出てきて食べ物を探す。人はこの鼠を捕獲して、その毛で布を作る。今の火浣布はこれである。（炎火の山とは）この山の類である。

『山海経』によれば、西王母の住む崑崙の丘のふもとには弱水がめぐり、その外に「炎火の山」がある。郭璞の注釈は、「炎火の山」と似た火山国の詳細を述べ、類推させようとするものである。対象となる事物の詳細が分からない場合、別の場所の似た事例を示すのは、郭璞の注釈のパターンの一つ。崑崙と火山国は類似しているが、場所としてははっきり区別されているのである。耆薄国とは、諸薄国のことだろう。諸薄国は南海の交易の集積地だったところで、今のジャワ島にあったとされている。「今の火浣布」というのは、『周書』などに見える西戎の火浣布と区別するためであろうか。

火の中の白鼠については、郭璞はここではこれ以上述べない。ただし、『爾雅』釈魚の「火龜」の注に、こつう。

此皆説龜生之處所。火龜猶火鼠耳。物有含異氣者、不可以常理推、然亦無所

怪。

これら（山龜、沢龜、水龜、火龜）はみな龜の住んでいる場所を言っている。火龜とは火鼠のようなものである。物には異気を含むものがあり、常理では推し量れない。よって何も不思議なことではないのである。

ここでは火鼠の存在が火龜の存在を裏打ちしている。「火鼠」火浣布の存在が確認されていることによって、郭璞は、常理を超えた他の類似現象の真偽をも連鎖的に確認しようとしているのである。

ところで、冒頭に引いた干宝の『搜神記』には、引用部分の前に次の一節がある。ここでも火浣布は炎山の中の草木や鳥獸の毛から作られるとされるが、その場所は崑崙である。

崑崙之墟、地首也、是惟帝之下都、故其外絕以弱水之深、又環以炎火之山。山上有鳥獸草木、皆生育滋長於炎火之中。故有火浣布、非此山草木之皮、則其鳥獸之毛也。

崑崙の墟は、地の頭にあたる場所で、帝の下都である。よって、その外は（いかなる物も浮かばない）弱水の深い濠で隔絶され、その周囲には炎火の山がめぐっている。山の上には鳥獸がおり草木が生えているが、みな炎火のなかで生まれ育っている。よって、「火浣布」というものがあるが、それはこの山の草木の皮でなければ、この山の鳥獸の毛なのである。

一見して分かるように、郭璞が区別していた崑崙の炎火の山と、火浣布を産する山が同一視されている。地図が未完成であった時代、ひとは従前の知識と新たな知見を統合しようとした。その従前の知識が神話伝説によったものであれば、その結果として、事実の間に虚構が入り交じる。これは昔から絶えず繰り返されてきたことであつて、³⁵いくら探索が進もうが西王母のすむ崑崙や弱水が觀念上の地図から消されることはない。事実が加わることに、意図するとせざるにかかわらず、虚構の部分がますます真実みを帯びてくるという仕組みになっているのである。例えば、『魏略』西戎伝（『三国志』魏書・烏丸鮮卑東夷伝注引）には、弱水についてこつう。

前世謬以爲條支在大秦西、今其實在東。……前世又謬以爲弱水在條支西、今弱

水在大秦西。前世又謬以爲從條支西行二百餘日、近日所入、今從大秦西近日所入。

以前は条支（今のイラクのあたり）が大秦（ローマ）の西にあると誤解されていたが、実は東にある。……以前は弱水は条支の西にあると誤解されていたが、今は弱水は大秦の西にあるとされている。以前は条支から西に二百日余りで、日の沈むところに近づく誤解されていたが、今は大秦の西にいくと日の沈むところに近づくとしてある。

ここで「前世」というのは『漢書』以来の認識を示している。ここではその誤解を正そうとしているのだが、いかに地図の書き換えが行われても、日の沈む所は最も西にあり、その手前に西王母のすむ場所があるということは変わらない。発見は知識の塗り替えを迫るのではなく、その後の整理を通じた知識の再構成を促すのである。

干宝は郭璞に比べ、知識を統合するに性急であった。というよりも、西域の火浣布という歴史記載や地理観念により忠実であろうとすれば、当然の帰結であったかもしれない。ましてや、遠い異域は神怪の世界と混在していて境目が無いのだから、推し測るよりすべがない。むしろ、郭璞のようにストイックな注釈者の態度を貫き通すほうが特異であったというべきであろう。

さて、ここまで葛洪・郭璞・干宝という東晋を代表する博学の士の火浣布論を見てきた。三者はそれぞれ存在の証明された不思議を自身の理論・主張の証左として利用している。念のために確認しておけば、彼らの論においては、火浣布の素材が獣毛であろうと樹皮であろうと、それは大した問題ではない。具体的な産地は重要だが、それよりも肝心なのは、それらが異地の異気を受けたものであるという点である。実在を証明するだけの時代はとうに去り、眼前に存在する不思議をいかに説明するかに力点が移っていることは明らかであろう。火浣布の存在は、空間軸で見れば、「既存の学問を集大成し、権威化を図った魏」と「異物にみち、新たな知識を積極的に取り込んだ呉」の地域文化の差を象徴するものであった。一方、時間軸で見れば、従来の学問と東晋の学術、とりわけ、「真偽の検証」から「理の解明」へという博物の学の質の差を象徴するものであるといえよう。してみれば、石刻事

件は、「真偽の検証」の時代の終わりを告げる出来事でもあったのである。

結びにかえて

新たな物の存在が認められるということは、新たな場所の存在、中原とは別の理によって成り立っている世界の存在が認識されるということである。したがって、火浣布が話題となったこの時代は、「物」から世界の広がりを知ることが意識化されてきた時期であったともいえる。先に、火浣布のことを記した書物のひとつとして東晋『発蒙記』を引いた。この書はすでに散佚しているが、『隋書』経籍志によれば、「物産の異を載す」ものだったという。異物から蒙を發く——呉から西晋にかけて編まれた「異物志」「方志」の数々はまさに人々の常識のガラを打ち破るものであった。ここまでみてきたように、その価値の転換の間に、呉の異物の学が少なからぬ影響を与えていることは間違いないだろう。

さて、蒙を發かれた人々が、異物を記し、論じ始めたこと、これは学問の領域の拡大であったともいえよう。梁冀の逸話のごとく、魏においては、火浣布は俳優の語るものにすぎなかった。俳優の語りといえば、曹植が白粉をぬって俳優の言を述べたあと、正装に着替えて天地万物の理や賢人の優劣、政治、文章を論じたというエピソードが示すように、正当な学問とは一線を画すものであった。その俳優の語った異物が、西晋の張華や東晋になると、博物学の一つとして大真面目に取り上げられるようになったのだ。

呉・西晋の学問を受けた東晋の郭璞、葛洪、干宝らは、それ以前の蓄積を自らの学問・主張のなかにうまく組み入れていった。存在が保証された「異物」は、新たな理の探求の過程で、確かな根拠として作用したのである。本稿でみた火浣布は、その「異物」の代表であったといえよう。

その後の展開については、本稿の及ぶところではないが、簡単にいえば、火浣布は、神仙道教系故事に恰好の小道具となっていく。一つだけ、例をあげておこう。豫章人劉廣、年少未婚。至田舎、見一女子、云「我是何參軍女、年十四而夭。爲西王母所養、使與下土人交」。廣與之纏綿。其日、於席下得手巾、裏雜香。其母取巾燒之、乃是火浣布。（『搜神後記』卷五）

豫章の劉広は、年若く、未婚だった。田舎の家で一人の女に出会った。女は、「私は何参軍の娘で、十四才の若さで死にました。西王母に養われ、下界の人と交わるように命じられています」という。広は女と深い仲になった。その日、敷物の下からハンカチが見つかり、鶏舌香が包んであった。広の母がそのハンカチを焼いたところ、火浣布だった。

鶏舌香とは、丁香（クローブ）のこと。『異時外国伝』に南海の馬五洲（インドネシアのマルク諸島）の産物とする。火浣布の「手巾（ハンカチ）」のほうは、『異時外国伝』（前出）に見えるように火洲の産物。ここでもやはり、西王母のもとにある仙界の宝物は南海由来の「異物」なのである。さて、明らかに貴重な香木であると分かる鶏舌香に対し、それをつつんでいるハンカチは見た目には普通の布と変わらない。火浣布は、焼かれることによって、異界を再確認させる装置である。言葉をかえれば、奇術的な効果をものがたりに与える魔法の布とも言えようか。いっとき学術の対象となった火浣布は、識者のお墨付きを得た上で、ふたたび俳優の語る幻惑的な世界にもどったようである。

（注）

（1） 現行の『搜神記』二十巻本は、『法苑珠林』に取材しているため、「火浣布袈裟」に作るが、『三國志』三少帝紀裴注、『太平御覽』卷三八、八二〇に引く『搜神記』には「袈裟」の二字がない。汪紹楹も指摘するように、仏教の宣伝のために付け加えられたものだろう。

（2） 劉秀（劉歆）『山海經叙録』によれば、漢の宣帝の時に、石室の中から、後ろ手に縛られ枷をはめられた人が発見され、劉向が『山海經』に基づいて「式負の臣」だと答えたため、『山海經』への評価が高まった、という。

（3） 火浣布については、古くは平賀源内「火浣布略説」、兪正燮『癸巳存稿』卷十「火浣布説」があり、ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』（海野一隆ほか訳、思索社、一九七六）第六卷「地の科学」第二章「地理学と地国学」にも「石綿」について述べた部分がある。

（4） 『三國志』魏書・三少帝紀（景初三年）二月、西域重譯獻火浣布、詔大將軍・太尉臨試以示百寮。

（5） 『三國志』魏書・明帝紀（太和四年二月）詔太傅三公、以文帝典論刻石、立于廟門之外。

（6） 『三國志』魏書・三少帝紀（齊王芳）裴注「臣松之昔從征西至洛陽、歷觀舊物、見典論石在太學者尚存、而廟門外無之。問諸長老、云晉初受禪、即用魏廟、移此石于太學、非兩處立也。竊謂此言爲不然」。

（7） 『列子』湯問篇にも「周穆王大征西戎、西戎獻鍬鍬之劍、火浣布。……火浣之布、浣之必投於火、布則火色、垢則布色、出火而振之、皓然疑乎雪。皇子以爲無此物、傳之者妄。蕭叔曰、皇子果於自信、果於誣理哉」とある。この「皇子」を魏文帝のことだとする説（光聰諸『有不爲齋隨筆』）もあるが、これをもって『列子』を葛洪以降の書だとする説（兪正燮『癸巳存稿』）もあり、成立年代を特定できないので、ここでは扱わない。

（8） なお、北魏の楊街之『洛陽伽藍記』卷三報德寺によれば、『典論』六碑のうち、残っていたのは四碑だけだという。「魏文帝作『典論』六碑、至太和十七年、猶有四存」。二碑がいつ失われたのかは分からない。

（9） 時代は下るが、『法苑珠林』卷四七にも次の話があり、細部が違っている。「魏文帝時不信南方有火浣布、帝云、火功尙能鑠石銷金、何爲不燒其布。文帝既崩、至太子明帝時、西國有獻火浣布袈裟、明帝初依父語不信、以火試之、久燒不壞、始知有徵、言不虛也。文帝前已著史籍上有不信火浣布之文者、並私改有之」。

（10） 『全三國文』卷八。

（11） 「硃石・硃硃、皆石之次玉者。硃硃、赤地白采、葱蘢白黑不分」。

（12） 「蘂蕪、蘂芷也。似蛇床而香」。

（13） 他にも、「魏文帝詔羣臣曰、南方龍眼荔枝、寧比西國葡萄石蜜乎、酢且不如中國凡棗味、莫言安邑御棗也」（『太平御覽』卷九六五）、「吳曆曰、吳王饋魏文帝大橘、魏文帝詔羣臣曰、南方有橘、酢正裂人牙、時有甜耳」（『太平御覽』卷九六六）、「魏文帝與朝臣書曰、江表唯長沙名好米、何時比新城梗稻耶、上風炊

之、五里聞香」(『太平御覽』卷八三九)等がある。残っている資料に偏りがあ
るのかもしれないが、曹丕はとも南方の物産に手ぬかしい。

(14) 最後の六字を、中華書局(上海涵芬樓影印宋本複製重印)本では「白疊故鮮
皮也」に作るが、四庫全書本により改めた。

(15) 『三國志』文帝紀の裴注に引く胡沖「吳曆」に「帝以素書所著典論及詩賦餉
孫權、又以紙寫一通與張昭」という。

(16) 『三國志』魏書・華佗伝裴注引「典論」に「劉向惑於鴻寶之說、君游眩於子
政之言、古今愚謬、豈唯一人哉」とある。

(17) 『三國志』魏書・華佗伝裴注引「弁道論」に「自家王與太子及余兄弟咸以爲
調笑、不信之矣」とある。

(18) 『列異伝』は散佚しているが、佚文から遅くとも西晋初めには成立していた
とされる。文帝紀には見えず、『隋書』経籍志に至って曹丕の名が冠せられ
た。また、佚文には曹丕の死後の出来事もある。王国良「列異伝研究」(『六朝

志怪小説考論』文史哲出版社、一九八八)参照。

(19) 瓊樹については、「蓬萊三山、神仙所居、故宜有焉」と述べるのみ。『楚辭』
に見える「瓊藥」の語を用いた表現なので、実在する物を指しているかどうか
は不明。

(20) 杉本直治郎「三國時代における呉の対南策」(『東南アジア史研究Ⅰ』巖南堂
書店、一九六八)参照。

(21) 曹植の曹丕を弔う誄(文帝紀裴注引)にも、遠方からの貢献に言及する
部分があるが、「肅慎納貢、越裳效珍」と常套表現にとどまっており、呉ほど
具体的な実績のなかったことがうかがわれる。

(22) 『太平御覽』卷七八六に「外国伝」として引く。渡部武「朱応・康泰の扶南
見聞録輯本稿——三國呉の遣カンボジア使節の記録の復原」(『東海大学紀要

文学部』第四三輯、一九八五)に従い、『呉時外国伝』とみなす。

(23) 輯本に、内田吟風「異物志」考―その成立と遺文―(『森鹿三博士頌壽記
念論文集』、同朋舎出版、一九七七)、渡部武(注22参照)がある。また、呉永

章「異物志輯佚校注」(広東人民出版社、二〇一〇)は漢の楊孚の『異物志』

を集めたものだが、楊孚以降の『異物志』の記載を大量に含み、各条に考証が
ある。なお、朱応・康泰の「記伝」の書名については混乱があるが、ここでは
無理に統一せず、類書等に記されているままの形で示す。

(24) 大秦とも、陸路ではなく、海路で通交するのが普通であった。『三國志』魏
書・烏丸鮮卑東夷伝裴注引「魏略」西戎伝にも「大秦道既從海北陸通、又循海
而南、與交趾七郡外夷比、又有水道通益州永昌、故永昌出異物。前世但論有水
道、不知有陸道、今其略如此、其民人戸數不能備詳也」という。

(25) 『三國志』魏書・三少帝紀の裴注に「異物志」として引く。『太平御覽』卷
七八七に同様の文を「万震南方異物志」と引くことにより、万震の作とみ
なす。なお、『南州異物志』については、小川博「南州異物志」輯本稿、
同「南州異物志」輯本稿(その二・完)」「(安田学園研究紀要)二・三、
一九五八・五九)参照。

(26) 『藝文類聚』卷九一に引く「呉時外国伝」に「扶南東有漲海、海中有洲、出
五色鸚鵡、其白者如母雞」という。また、先に引いた火浣布の記事を参照。

(27) 「史記」大宛伝「索隱」引「外国伝」。同じ「史記」大宛伝の「正義」にも
「康泰外国伝」として同様の文を引く。また、『白氏六帖事類集』卷三に引く
「異外国伝」には「大秦國王宮殿水精爲瓦」という記事もある。

(28) その際、広州にいた殷巨が「奇布賦」を作っており、その序にこういう。
「惟泰康二年、安南將軍廣州牧(騰)侯作鎮南方、余時承乏、忝備下僚。
俄而大秦國奉獻琛、來經于州、衆寶既麗、火布尤奇」(『藝文類聚』卷八五)。

(29) 深見純生「マラッカ海峡交易世界の変遷」(『岩波講座東南アジア史 第一卷
原史東南アジア世界』岩波書店、二〇〇一)に、「二世紀に始まった南海諸
国の中国への朝貢は三、四世紀の二世紀間には中国の政治的分裂と経済社会の
混乱もあって扶南と林邑のおおの約一〇回、堂明と大秦のおおの一回と少な
かったが、四二〇年中国に南朝の宋が成立すると一気に活性化した」という。

(30) 本来、神仙道教による大秦のユートピア化についても考慮に入れるべきだ
が、本稿では力及ばない。山田慶兒「鍊金術者のユートピア」(『本草と夢と鍊
金術と——物質的想像力の現象学』朝日出版社、一九九七)を参照されたい。

(31) 具体的な品目としては、次のものを挙げる。「土多金銀奇寶、有夜光璧、明月珠、駭鷄犀、珊瑚、虎魄、琉璃、琅玕、朱丹、青碧、刺金縷繡、織成金縷罽、雜色綾。作黃金塗、火浣布。又有細布、或言水羊毳、野蠶繭所作也。合會諸香、煎其汁以爲蘇合。凡外國諸珍異皆出焉」。

(32) その他にも、『抱朴子』には二か所、『蕭丘』に言及した箇所がある。「寸膠不能治黃河之濁、尺水不能却蕭丘之熱」(外篇・嘉遁)。「凝冰慘慄而不能凋款冬之華、朱蘗鑠石而不能靡蕭丘之木」(外篇・広譬)。

(33) 『山海經』大荒東經に「溫源谷」と見え、郭璞注に「溫源即湯谷也」という。また、『穆天子伝』卷一に「乙丑、天子濟于河□、爰有溫谷樂都」とあり、郭璞注に「溫谷言冬暖也。燕有寒谷、不生五穀」という。

(34) 『北堂書鈔』卷一五七に「蕭丘多風、無人民、羣犬居之」とある。なお『太平御覽』卷五三には、これを『外国図』の文として引き、不死の樹が生える「貝丘^{えききう}」等と並べて述べる。

(35) 白鳥庫吉の言葉をかりれば、「さてかやうに『史記』の大宛傳をはじめとし、『漢書』の西域伝や『魏略』の西戎傳の如き、漢人が實地に踏査聞見した事實を眞面目に書き載せた書物の中に、西王母や弱水の如き神仙談が事々しく記されてゐるのは、畢竟するに漢魏時代に於ける思潮の反映であつて、上下一般の期待に應へようとする所から起つて來たものに外ならぬ。」(『西域史研究』下「大秦伝に現はれたる支那思想」、岩波書店、一九八二)

(36) 『漢書』西域伝に「安息長老傳聞條支有弱水、西王母、亦未嘗見也。自條支乘水西行、可百餘日、近日所入云」とある。

(37) 『魏略』西戎伝(『三國志』魏書・烏丸鮮卑東夷傳注)によれば、西王母のすむ山は、大秦の西海のさらに西にある。そこからさらに流沙、四つの国を経て、伝聞の及ぶ西の果て、黒水に至る。

(38) 『三國志』魏書・烏丸鮮卑東夷傳注に引く魚豢『魏略』西戎伝の「議」にも「余今汎覽外夷大秦諸國、猶尙曠若發蒙矣」という。

(39) 『三國志』魏書・王衛二劉傳伝の裴注に引く『魏略』に、「植初得淳甚喜、延入坐、不先與談。時天暑熱、植因呼常從取水自澡訖、傅粉。遂科頭拍袒、胡舞

五椎鍛、跳丸擊劍、誦俳優小説數千言訖、謂淳曰、「邯鄲生何如邪」。於是乃更著衣幘、整儀容、與淳評說混元造化之端、品物區別之意、然後論羲皇以來賢聖名臣烈士優劣之差、次頌古今文章賦誄及當官政事宜所先後、又論用武行兵倚伏之勢」とある。

(40) 火洲をとりこみ発展させた『神異経』『十洲記』『玄中記』に産物として登場するほか、『真誥』卷一にも惺惺華が羊權に「詩一篇、并火浣布手巾一、金玉條脫各一枚」を贈ったという。

(41) 『呉時外国伝』(『太平御覽』卷九八一引)に「五馬洲出鷄舌香」、「康泰扶南土俗」(『太平御覽』卷七八七南蛮馬五洲引)に「諸薄之東有五洲、出鷄舌香」とみえる。

(42) 晋の郭義恭『広志』(『太平御覽』卷七一六引)には「炎州以火浣布爲手巾」という。炎洲は『十洲記』等に見える火浣布を産する地。モデルになっているのはやはり火洲だろう。

(附記) 本稿は科学研究費基盤研究(C) 23520432による研究成果の一部である。

围绕火浣布的争论 ——魏晋时期有关“异物”的记载、故事及学术

OHIRA Sachiyo

火浣布亦即石棉，据史书记载，汉魏时期西域使者来到中国进贡了此布。关于火浣布，有一个比较有名的故事：魏文帝曹丕在《典论》中斷言世上并无此布，其子明帝将此言刻在石碑上，不久西域献上火浣布，明帝就毁掉了石碑上的字。然而，据考察，这并不是事实。那么这个故事是从何而来？故事只能追溯到东晋的《搜神记》和《抱朴子》，因此，本文将从两个方面阐明东晋初期的文人纷纷谈论火浣布的原因：一是孙吴的对南政策以及方志、异物志的编纂；一是东晋时期的学术，尤其是博物学的性质。围绕火浣布的争论意味着曹魏与孙吴之间的异物观念的差异，也意味着从魏到东晋的学术潮流的变化。